

大遠忌の歩みと その時代

第四回 六百回忌

【その時代】

広如宗主の代で厳修された六百回忌は、ペリーの来航と開国、幕府と雄藩との対立激化、法会前年には大老井伊直弼が暗殺されるなど、社会的に不安定な時代でした。

本願寺はこの時期蝦夷地（北海道）開教を進め、学林はキリスト教への対応を本願寺に建白、法会三年後の禁門の変では下京が全焼、本願寺も焼失寸前でした。六百回忌はこの動乱期のなか厳修されたのです。

【六百回忌の予修】

法会はすでに天保年間の財政改革の頃より配慮され、嘉永五年（一八五二）正月十八日、本願寺は「御開山様六百回御遠忌御取越御執行被仰出候旨」を発表し、準備に着手します。

まず大谷仏殿の修繕をはじめとし、御廟塔・拜堂・中門・参道などをそれぞれ修理あるいは新造しました。その費用及び法会の用度取賄方は、改革担当の石田敬起などに引き請けてもらい、宗主も文庫金（私財）百両を負担しました。

嘉永六年三月二十三日連夜から二十八日まで、大谷本廟で六百回忌の予修が行われました。続いて予修は安政三年（一八五六）三月西山御坊で、四月には近松顕証寺で、さらに翌年山科御坊でも執行されました。そして万延元年（一八六〇）三月、宗主は大和・河内・紀伊・和泉・堺などに下向し、各御坊での予修も行いました。



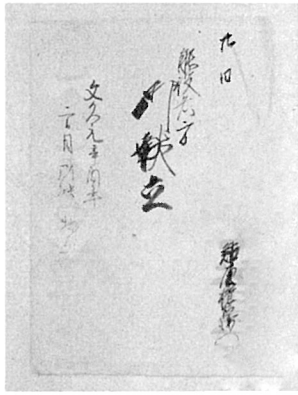
文久元年三月「御遠忌別記下帳」
遠忌法会の記録。

【両堂の修復】

阿弥陀堂修復は、安政四年（一八五七）三月着工、翌年三月工を終え、続いて同月御影堂の修復に入り、同年五月には「御直命趣意書」が発せられました。万延元年九月、御影堂修復は完了し、同月晦日遷座式、文久元年（一八六一）正月二十日、阿弥陀堂遷仏式が挙行されました。対面所・白書院・飛雲閣・玄関、その他も安政六年から万延元年にかけて修復・造営がなされました。

【六百回忌の厳修】

文久元年三月十八日から二十八日にかけて大遠忌は厳修されました。三月十四日、伝奏広橋光成、同坊城俊克を通じ、



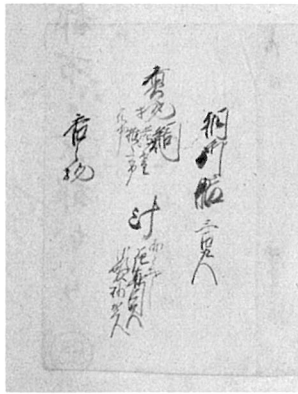
文久元年三月「能役者方御献立」祝の能における能役者方への献立記録。二日目の食事を記す。

孝明天皇より、宸翰・報恩講式・嘆徳

文・伝来香木など、親王から香炉・白銀三十両、准后から白銀三十両の寄進があり、宗主は三月十六日、徳如新門跡とともに参内し、その礼を表しました。

庭儀は、十九日・二十三日・二十八日に行われ、特に二十三日中には幄屋を出発、唐門を経て、七条米屋町・仏具屋町・花屋町堀川を通り、阿弥陀堂門に入りました。勤式は日没に始まり、三回十曲の舞樂を終わり、法会の終了は深夜でした。

三月二十九日、宗主はその満座に当たり、北集会所において御直命趣意書を発します。そこには「自分が大遠忌の厳修をなしたことに大変満足しており、



同上「朝御膳」煮物と汁、香の物がみえる。なお煮物は鯛である。

これ以上の歎はない」と表明されました。三月晦日、精進解の宴が設けられ、能が開催され、法会の行事は終焉しました。

なおこの遠忌には、広如宗主とともに徳如新門跡・明如新々門跡がそれぞれ導師を勤めました。このように三人の門跡が大遠忌を勤めることはそれまででありませんでした。

六百回忌における若き新門跡たちの活躍は、やがて到来する新たな時代をも予期させる行事となったのでした。

（本願寺史料研究所主任研究員 大喜直彦）